

主をほめたたえよ 詩篇 103:15-22	2021. 11. 7(霜月)丘の上 NO. 669 春日部福音自由教会 山田豊
------------------------------	---

人間は、どこまでいっても自己中心です。この詩篇は、最初と最後に、主なる神をほめたたえよ、と歌っています。聖書で使うほめたたえるという語は、祝福するという意味があります。人間が神を祝福するというのは、いきさかおかしなことですが、これは神様を賛美し、神様のみわざをたたえ、そして神を第1として生きることを告白する表現であると解釈することができます。

103篇の前半(1-5)には、主の良くしてくださったことを忘れるなどとして、六つのことが3節から5節に書かれています。ご自分の体験と照らしてみてください。罪のゆるし、病の癒し、死からの守り、恵みとあわれみ、良いもので満たされること、新しい力を得る、ということです。また、イスラエルの歴史、特に出エジプトのことを踏まえて、主なる神はあわれみ深く、情け深いことが歌われています(6-14)。イスラエルの民は頑なであったため、約束の地に入るまで40年かかりました。それでも、神の守りがあったので、目的を達成することができたのです。

本日の説教箇所のポイントとなるのは、チリに過ぎない人間は花が咲いてしぼんでしまうように消え去ってしまうが、神様は変わることがないお方である、そしてみ言葉は変わることがない、ということです。イザヤ書のことばをペテロが引用して書いています。1ペテロ1:24,25「24「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。25しかし、主のことばは永遠に立つ」とあるからです。これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。」日本語訳聖書も、時代とともに変わる言葉に合わせ、また聖書学の研究成果を踏まえ、改訂版が出されます。表現は変わりますが、聖書のメッセージは変わることがないのです。そして私たちを教え導くという、聖書の目的も変わりません。

昔から日本人は、松の緑(翠)は変わることはない色としてめでたい色だと思っていました。多くの木草の葉の色が変わり落葉しても、松の緑は変わりません。常緑樹ですね。クリスマスのシーズンには、赤と緑の色が使われます。赤はキリストの血潮を表し、罪からの救いの象徴となっています。緑は変わることはないイエスキリスト、神様ご自身を表し、いのちの象徴となっています。

人生の花を咲かせるために、キリストに根付く者でありましょう。変わることはないみ言葉から栄養分をいただくのです。やがて散っていくときがあっても、神の国では新しくされるのです。主なる神をほめたたえることこそ、造られたものの務めなのです。

引用聖句

イザヤ 35:1-2 荒野と砂漠は喜び、荒れ地は喜び躍り、サフランのように花を咲かせる。盛んに花を咲かせ、歡喜して歌う。これに、レバノンの栄光と、カルメルやシャロンの威光が授けられるので、彼らは【主】の栄光、私たちの神の威光を見る。

イザヤ 40:7-8 【主】の息吹がその上に吹くと、草はしおれ、花は散る。まことに民は草だ。草はしおれ、花は散る。しかし主の言葉はとこしえに変わることがない。

1ペテロ 1:24-25 「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは永遠に立つ」とあるからです。これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。

ローマ 15:12 エッサイの根が起こる。異邦人を治めるために立ち上がる方。異邦人はこの方に望みを置く。

イザヤ 11:10 エッサイの根はもろ物の民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼の留まるところは栄光に輝く。

サフラン 〈へ〉ハバツツェレス（イザ 35:1, 雅 2:1）, カルーコム（雅 4:14）. イザ 35 章は喜びの章で、その頂点に咲いた一輪のサフランは小さい花であるが、神の勝利と栄光を表現してあまりある。元訳では番紅と書いてサフランと読ませている。泊夫藍, 咀夫蘭, いろいろな字を当てる。このサフランは学名を *Crocus sativus* L. と言って、あやめ科の球根植物である。昔から薬用植物として有名で、雌しべの柱頭の黄赤色の部分を陰干しして用いた。サフラン独特の芳香があって、これがヒステリーの鎮静剤、通経剤として用いられた。また民間では風邪薬に使ったり、食品類や化粧品の着色料に用いられる。本来のサフランは秋咲きであるが、春咲きの *Crocus vernus* Wulf. もあり、こちらは観賞用でハナサフランと言う。Crocus とはギリシヤ語の「糸」という意味で雌しべの柱頭が糸状になることに由来する。（新聖書辞典より）

寒松一色千年別 寂然(じゃくねん)と人の世を諦観(ていかん)するが如く老松(おいまつ)が屹立(きつりつ)している。樹齡はいかほどかわからないが、相当な年輪であろう。風雪に耐えて、なお生き続け、しかも変わらぬ美しい緑をいつも保っている。そんな松の姿には他の樹木にはない格別の趣があります。（横山友宏、東光寺副住職のブログより）